第一篇　始計

一

孫子はいう。戦争とは国家の大事である。国民の死生が決まり、国家の存亡がかかっているのであるから、最初に戦争するか、しないかを慎重に判断しなければならない。それゆえ五つの事を常に考慮し、我と敵の実情を比較してどちらが有利であるかを考察する。

五つの事とは道、天、地、将、法であり、これらは兵法の根源である。道とは、国民と統治者の心を一つにさせる政治の道理である。これにより国民は死生を共にすることを当然のことに思う運命共同体となるのである。天とは、日陰・日向、寒暑、四季の推移など、天候や気象である。地とは、遠近、険しい緩やか、広狭、高低などの地理・地形とそこに居る住民である。将とは、智力・信頼・仁愛・勇気・厳格さといった将軍の資質である。法とは、軍法・命令・編成・職務権限と鐘・太鼓・旗などの統制手段である。これらの五事について、将軍であれば聞いていないなどということがあってはならない。それを知っている者は勝ち、知らない者は勝てないからである。それゆえ、五事を知ったならば、次の視点で我と敵のどちらが有利であるかを考察する。これを「七計」という。

①君主（統治者）はどちらが道理を踏んでいるか。②将軍はどちらが

有能か。③天の時・地の利はどちらにあるか。④法令はどちらがよく守られているか。⑤兵器と民衆はどちらが強いか。⑥兵士はどちらがよく訓練されているか。⑦賞罰はどちらが公正明大であるか。

私は、この五事七計によって勝敗を知るのである。

二

もしも大将が、私が言うところの五事七計を聴き容れ、これを用いた戦略的判断を行うのであれば必ず勝てるので、私も軍師としてここに留まる。大将が五事七計を聴き容れず、これを用いた戦略的判断ができなければ必ず負けるので、私は速やかに去っていく。

五事七計で判断して我に利があれば、開戦前に国内で準備すべき事の多くは整うことになる。それでも、敵と戦場で戦おうとする時には不確定の要素が多く、偶然性にも支配されることから、「勢」というものによりこれを補わねばならない。勢とは、こちらに五事七計の利があることを活かして、その場に適した臨機応変の処置をとることである。

三

戦争とは「詭道」である。つまり、敵を詐り欺くことで裏をかき、判断を誤らせるのを常とする。それゆえ、能力があっても無いように見せかけ、能力が無くて謀を用いても、能力があるように見せ、近くにいても遠くにいるように思わせ、遠くにいても近くにいるように錯

覚させ、利益を与えて敵を誘い出し、混乱させて討ち取り、敵が充実しているときは備えを固くし、敵が強ければこれを避け、敵が怒るように挑発して心をかき乱し、こちらからへりくだって驕りたかぶらせ、安んじて疲れていなければ疲労させ、親しみあっていれば分裂させる。敵が備えていないところを攻め、敵の不意を突いて奇襲する。このように「詭道」とは、兵法家が用いる「変化に応じ勝ちを取る術」であり、五事七計による戦略判断や正攻法の戦術などの「正道」より先に伝授すべきものではない。

四

さて、戦争をすると決めたならば、開戦に先立って「廟算」をする。廟算とは、祖先の霊廟における作戦会議であるが、勝つべき者とはこの廟算であれこれと議論を重ね、漏れの無い作戦（算）を多く立てている者のことである。廟算しても勝てない者とは、怠けて通り一片の議論ですまし、わずかに抜けだらけの作戦しか立てなかった者である。作戦の数が多ければ勝つが、作戦が少なければ勝てない。まして作戦さえも立てずに開戦するなどは云うに及ばない。私にはこの廟算において、どれだけ議論を重ねているかを観察するだけで、勝敗が事前に見えてくるのである。